

〔課題演習報告〕

主体的により良い生活づくりに参画する児童を育む学級風土の向上
―校内研究システムにおけるコンサルテーションを通して―

後 藤 和 歌 子

Wakako GOTO

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース
久留米市立東国分小学校

(2017 年 1 月 6 日受理)

本研究は、校内研究システムにおけるコンサルテーションを通じて、学級担任の学級活動(1)の指導力と学級風土を向上させ、主体的により良い生活づくりに参画する児童を育むことを目的として行った。研究Ⅰでは、在籍校における教職員の学級活動に対する意識調査と実施状況から、在籍校における教員の学級活動の実施上の課題を明らかにした。研究Ⅱでは、第5学年における学級活動(1)の授業づくりへの支援を通じて、学級担任の学級活動(1)の授業づくりに対するコンサルテーションの内容を明らかにした。研究Ⅲでは、報告者が研究主任や各学年の研究推進委員に対して、研究推進の仕方や学級活動(1)の授業づくりに関するコンサルテーションを行う校内研究システムを通じて、在籍校の学級担任の学級活動(1)の指導力向上に取り組んだ。その結果、学級風土が向上され、主体的により良い生活づくりに参画する児童を育むことにつながることが明らかになった。

キーワード：学級活動(1)、話し合い活動、校内研究システム、コンサルテーション、学級風土

問題と目的

在籍校の児童は、生活のきまりを守ったり落ち着いて学習に参加したりすることはできるようになっている。しかし、学校長が示す平成27年度の学校経営方針には、「在籍校の児童には、主体的に考えたり行動したりする能力が育っていない。」と記され、その理由として、教師の指示を待つ姿が見られること、児童自らが積極的に行動するにまで至らないこと等が挙げられた。

そこで、在籍校の教育課題の解決に向け、校内研究による、学級活動(1)「学級や学校の生活づくり」(以下、学級活動(1))の充実を目指し、研究主題を「主体的により良い生活づくりに参画する児童を育む学級風土の向上」と設定した。在籍校の教育課題の解決と学級活動(1)の充実との関係は次に示す通りである。

学級活動(1)には、学級の生活向上を目指した問題解決のための話し合いや、話し合いで決まったこ

との実践、実践したことの振り返りなどの過程を通して、「より良い生活づくりのために進んで参画しようとする態度」や「自ら進んでより良い人間関係を形成しようとする態度」などの学級風土を向上させるという教育課程上のねらいがあるからである。

しかし、在籍校には、年間指導計画に沿った学級活動(1)の授業が十分に実施されていなかったり、学級活動(1)に対する研究経験が不十分な職員が多かったりするという実態がある。そこで、報告者が校内研究システムに介入し、学級活動(1)の実施に向けたコンサルテーションを行うことで、学級担任の学級活動(1)の指導力向上と、在籍校の教育課題の解決に取り組むこととした。

コンサルテーションは、通常、異なった役割や専門性をもつ者同士がコンサルティとコンサルタントとなり実践を進めていく。この研究におけるコンサルテーションは、大学院で学級活動(1)に関する専門的な学びを深めた現職教員である報告者が、校内研究システムに介入し研究主任や研究推

進委員といった在籍校の教員に対して行うものである。

研究Ⅰ 在籍校における教職員の意識調査

調査の概要

目的

本調査は、学級担任の、学級活動の指導に関する意識を調査することによって、学級活動の指導上の課題を明らかにし、今後の学級活動の指導の充実に向けたコンサルテーションに生かしていくことを目的とする。

方法

(1) 調査期間

平成27年12月10日～12月28日

(2) 調査対象

福岡県内の公立小学校1校の教職員28名

(3) 調査方法

質問紙と記述式によるアンケート調査

(4) 意識調査の内容

意識調査の内容は表1に示す。

表1 意識調査の内容

- 1 特別活動の充実は学校の安定に効果があると思うか
- 2 特別活動の充実、学級の安定に効果があると思うか
- 3 2学期、学級において学級活動(1)をしていたか
- 4 2学期、学級において学級活動(2)をしていたか
- 5 学級活動に関する考えについて
- 6 担任している学級の子供たちは、学級活動の時間は好きか
- 7 学級活動をする際に、学年の先生達で話し合うことはあるか
- 8 学級活動のカリキュラムを、どの程度参考にしているか
- 9 担任している学級では教室の中に、学級活動の掲示はあるか
- 10 担任している学級では学級目標は、どうやって決めているか
- 11 学級経営案をつくる際に、学級目標を意識しているか
- 12 担任している学級では、学級会コーナーが設けられているか
- 13 担任している学級では、議題箱が設置されているか
- 14 学級活動はどれくらいの頻度で行っているか
- 15 特別活動は、どんなことに役立つと思うか
- 16 学級活動をする際に、どんなことが難しかったり負担だと感じたりするか
- 17 学級活動をする際どんなことを考えたり感じたりしているか
- 18 子どもたちに身に付けたい力や態度はどういうものか
- 19 学級担任をする際、どんなクラスにしたいと思っているか
- 20 設問19のようなクラスにするために、具体的にどんなことをしているか

結果と考察

(1) 回答者の基本的属性

調査対象について、男女比は1:1である。その職務の内訳は教諭57%、講師29%、その他14%である。経験年数は5年未満21%、5～10年32%、10年以上46%である。

(2) 学級活動に対する考え方に表記された語句

「学級活動に対する考え方」に表記された語句

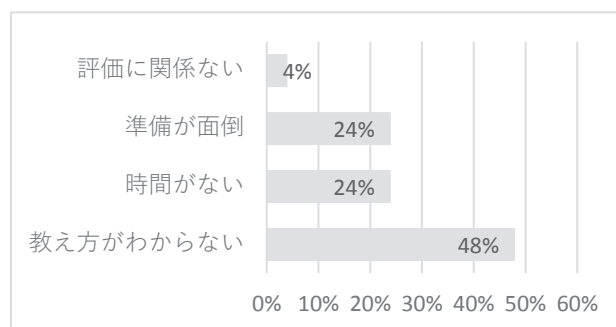


図1 学級活動に関する考え方

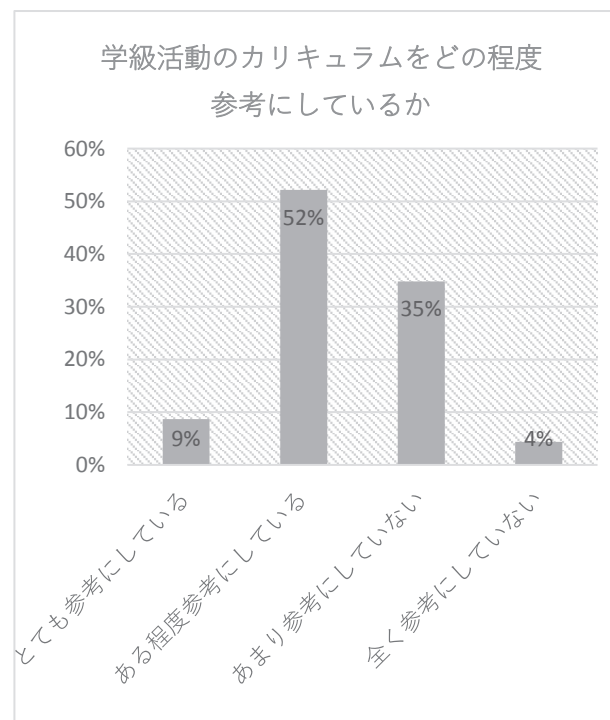


図2 学級活動カリキュラムの活用

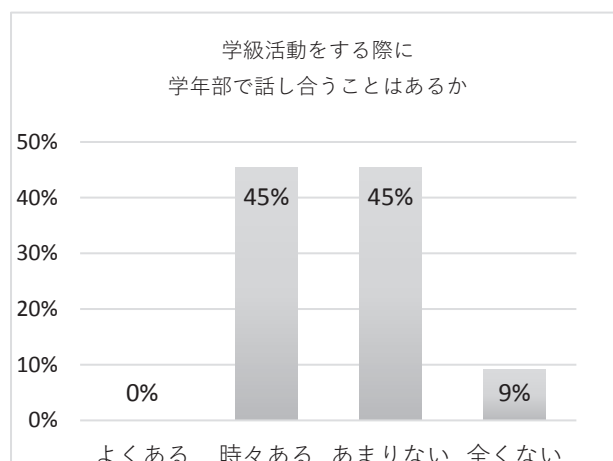


図3 学級活動に関する学年部での協議

を拾い出してみると、「学級活動の教え方がよくわからない」「学級活動をどうしていいかわからない」と、学級活動をどのように指導すればいいのかわからないという表記が13個あった。ま

た、「学級活動は教科書がないから実際に行うことができない(1個)」という表記を「教科書がないからどのように指導したらいいかわからない」とすると、「学級活動の指導方法がよくわからない(14個)」とまとめることができる。その他、「学級活動をする時間がない(7個)」「学級活動は面倒(7個)」「学級活動をしなくても評価に差し障りがない(1個)」という語句で在籍校職員の学級活動に対する考えを表記している。

このことから、在籍校の教員の多くが「学級活動の指導方法がよくわからない」と考えていることが推察できる(図1)。

(3) 指導方法がわからないことからくる課題

「学級会コーナーの設置」や「議題箱の設置」は、学級活動(1)「学級会」を児童が自主的・実践的に取り組むために必要な手立てであり、特別活動の研究会や実践者には学級会を実践する上で必要な基礎的・基本的な事項とされている内容である。

在籍校においては、「学級活動コーナー」が設置されている学級は6学級であり、17学級において設置されていない。また、議題箱は5学級に設置しており、18学級に設置されていない。

このことから、在籍校には「学級活動の指導方法がわからない」ということからくる指導上の課題が見えてくる。

(4) 学級活動のカリキュラムの活用

在籍校には、各学年の年間カリキュラムは存在する。しかし、それを参考にしていない教員は、1割以下であり、「あまり参考にしていない」「全く参考にしていない」教員を合わせると39%にのぼる(図2)。

(5) 学級活動に対する学年部での協議

学級活動の指導をどうしてよいか分からないと感じている教員が48%いるにも関わらず(図1)各学年部で相談したり話し合ったりしている教員は半数以下である(図3)。このことから、在籍校の教員は、学級活動の指導に関して不安を抱きつつも、それを共有する場や指導・助言を受ける場がないという状況にあることが分かる。このことが、学級活動が活性化しない原因の一つだと捉えることができる。

(6) 学級活動に対する若手教員の不安

教職経験の少ない若年教員の自由記述の内容を見ると、特別活動の教育的意義を、日々の実践の中で感じながらも、今、自分が行っていることが正しいのか不安を感じていたり、具体的にどのように学級会を進めたらいいのかわからなかったり

表2 教員の自由記述

【教師A・1年目】

意見の対立で、ゆずり合えない時の結論の出し方が難しい。

【教師B・4年目】

進め方、やり方を分かっているため、内容以前の問題で、これでいいのだろうか・・・と思う。

【教師C・8年目】

諸々の意見を取捨選択させたり、まとめさせたりするためには、どんな風に進めたらいいかやどう声かけしたらいいかわからないままやっている。

【教師D・9年目】

学年でどの程度まで子どもに任せていいのか、学年・年齢が違ふところでの指導の入れ方に迷う。

という不安を抱いていることがわかる(表2)。

(7) 学級活動に関する現況と原因

以上のことから、在籍校には生徒指導上の課題をはじめ、様々な課題があるにも関わらず、その解決に向けて、生徒指導的機能をもつ特別活動を活用しきれていないという状況が明らかになった。また、特別活動の充実が教育活動において大きな役割を果たすことがわかっているにも関わらず(図4)、特別活動を十分に機能しきれていない状況も見られる。これらの状況が見られる原因には、学級活動の指導方法が分からないという教員が多くいるということや、特別活動の効果についての理解が、一人ひとりの教員個々の経験に基づいているからだと考える。

研究Ⅱ 若年教員への授業支援

目的

本研究は、学級活動(1)のコンサルテーションの内容を探るために、以下の内容で授業支援を行うことを目的とする。

方法

(1) 若年教員への支援

平成27年12月に、若年教員(第5学年担任)を対象に、報告者が授業支援を行った。「仮装パーティの計画を立てよう」という議題の学級活動(1)の実施に向け、「問題の発見と話し合いの計画」の過程で「学級のみんなが楽しめるパーティにしよう。」という活動目標から提案理由を設定することや活動目標を具体化する話し合いになるように「目標達成のために何をするか。」「役割分担はどうするか。」を話し合いの柱立てにすることを助言した。また、「実践の振り返り」の過程で振り返りカ

ードを提示して自分のがんばりや友だちのよさを振り返ることを助言した。

結果と考察

話合いの後、子供たちは仮装パーティを自分たちで運営するために、一人一人が何らかの係に属し、準備段階から友だちと協働的に活動していた。これは、話合いの柱に「役割分担」の内容を位置づけたからだと考える。仮装パーティ後の子供たちの感想を見ると、活動に対して比較的満足している姿が見られた（表3）。

しかし「自分はこのクラスに必要か」という主体的な生活づくりへの参画につながる「自己有用感」の設問と「今日の学活は楽しかったか」という快の感情につながる設問の相関関係を見ると、楽しかったと答えた子供の多くが、自分はクラスに必要だという自己有用感も味わっている傾向があることが分かった（図4）。

以上のことから、一度の実践だけでは、自己有用感を十分に感じたか否かは明確に測れなかったが、友だちと活動することの楽しさを感じていることや、楽しいという快の感情が、クラスへの自己有用感を味わわせることに一定の効果をもたらすことも明らかになった。さらに、子供の感想からは、新たな活動への意欲や活動目標を意識して実践に取り組んでいたということも読み取ることができる。そこで、次年度、若年教員の多い在籍校では、学級活動(1)の指導方法に関するコンサルテーションを取り入れながら、全校的に学級活動(1)の指導力向上を目指していくこととした。

表3 実践後の子供の感想

- ・みんなが努力して、準備したかいがあったと思いました。
- ・少し周りを見ることができた。T君がクラス全体を笑わせてくれた。そのおかげで緊張せずに終わりの言葉が言えた。
- ・1学期と比べてだいぶみんなまとまってきたなと思いました。係の仕事も同じ係の人と話し合って準備したのでできてよかったです。

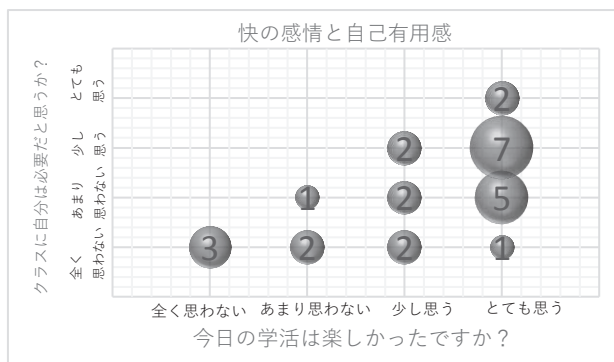


図4 快の感情と自己有用感の関係（人）

研究Ⅲ 校内研究システムにおけるコンサルテーション

目的

本研究は、校内研究システムにおけるコンサルテーションを通じて、A小学校の研究推進委員や学級担任の学級活動(1)の指導力向上を目指すものである。

方法

(1) 校内研究システムとコンサルテーション

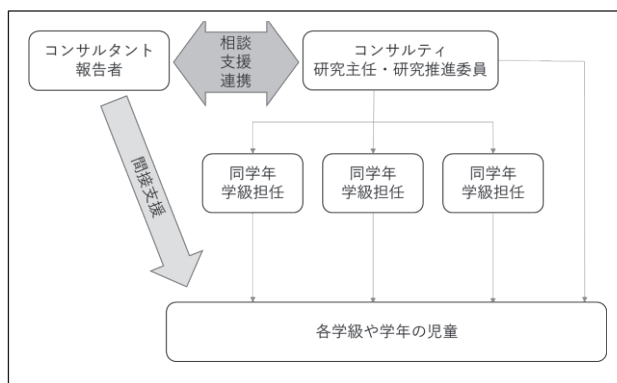


図5 コンサルテーションの図式

校内研究システムにおけるコンサルテーションとは、図5に示す通り、報告者が学級活動(1)の専門家として、また、学校心理学を専攻している者としてコンサルタントとなり、コンサルティである校内研究推進委員に直接的に関わったり、学級担任の授業づくりに間接的に関わったりするものである。

この、コンサルテーションの成果については、小学校教師版自己効力感尺度を用いて検証する。また、子供たちにどれ程の影響や効果があったかを、小学生版学級風土質問紙を用いて検証することとする。

(2) コンサルテーションの内容

コンサルテーションの主な内容については表4に示す通りである。

4月の段階は、主として管理職や研究主任、各学年の研究推進委員に対して、校内研究の主題の焦点化や研究推進計画の説明、授業づくりにつながる「学級会グッズの作成」、具体的な実態把握の方法についての説明を行った。5月から6月においては、授業研究会のコーディネートや授業づくりへの支援を行なった。7月から8月には、話合い活動の指導に効果的な環境整備を行った。9月から11月には、授業づくりや研修のまとめに関する支援を行い、12月には、効果の検証に関する説明を行った。

表4 コンサルテーションの主な内容

時期	対象	内容
4月	管理職 研究主任	研究主題の焦点化
4月	研究主任 研究推進 委員	研究推進計画の共通理解 資料提供
4月	研究推進 委員	授業づくりへの支援 『学級会グッズ』作成
4月	研究推進 委員	実態把握の仕方への支援 年間指導計画と実施状況とのすり合わせを行うよう助言、支援。
5月	研究推進 委員	授業づくりへの支援 学級会の校内授業研究会を開催 授業者：研究主任（第2学年担任） 研究会の内容：a 授業協議会（自評、質疑応答）b 大学教授からの指導助言
5月	研究推進 委員	実態把握の仕方への支援 折り合いをつけた話合いの発達段階での違いについて学習指導要領をもとに支援
6月	研究推進 委員	授業づくりへの支援 評価の観点について、学級会で最も重要である「集団決定の内容」が欠けていたことを報告者が指摘し、これからの学級会の授業づくりにおいて「何を、どのように集団決定するのか」という視点を明確にしていくことを確認。
6月	研究推進 委員	環境づくりへの支援 「話し言葉」の表を作成
7月	研究推進 委員	環境づくりへの支援 学年掲示板の活用について「学級会コーナー」を設定することを提案。
8月	研究推進 委員	環境づくりについて 校内掲示板
9月	研究推進 委員	授業づくりについて 協議会のもち方について
10月	研究推進 委員	授業づくりについて
10月	研究推進 委員	授業づくりについて 授業日程について
11月	研究推進 委員	授業づくりについて 校区プラン授業について 発達段階を考慮した話合いの進め方
11月	研究推進 委員	授業づくりについて 指導案について
11月	研究推進 委員	授業づくりについて 研修のまとめについて
11月	研究推進 委員	授業づくりについて
12月	研究推進 委員	実態把握の仕方への支援 「小学生版学級風土質問紙」の内容の説明と本調査から実証できる学級風土について
12月	研究推進 委員	研修に対する面談 「小学校教師版自己効力感尺度」について

結果と考察

(1) コンサルテーションの教師への効果について

図 6a・b・c は、小学校教師版自己効力感尺度の結果である。「生徒指導」「教師理解」「生徒理解」の3因子において数値が上昇した。さらに、研究主任を含む研究推進委員と、研究推進委員以外の、4月と12月の平均点を t 検定により検証した。その結果、コンサルテーションを行う前である4月とコンサルテーションを行った後である12月の平均点の変化は、研究推進委員と研究推進委員以外で、有意に差が見られた（表5）。

また、表6は、教師に対するアンケートに表記された内容である。この内容から、研究主任が、自分の授業づくりや研究推進に対する情報を得ることができたと捉えていることや、研究推進委員が学級活動(1)についての疑問点や不明点を明らかにしていったことが捉えられる。また、研修部に所属しない教師についても、校内研修の際、学年で話し合う時間を設けることで、話しやすい雰囲気になったと感じていたり全体では聞きにくいようなことも遠慮なく聞くことができたりしていることがわかる。

以上の結果から、報告者のコンサルテーションが研究主任をはじめとする研究推進委員の全校や学年の研究推進に効果的であったことが分かる。また、各学級における学級活動(1)の授業実施時数が昨年度よりも大幅に伸びていることや（図7）学級活動コーナーが全学級に設置された（図8）。さらに、研究Iで行った意識調査と比較すると、

表5 小学校教師版自己効力感尺度の t 検定結果

下位尺度		事前	事後	差(SD)	$t(df=17)$	
生徒指導	研究推進委員 (n=6)	2.667	3.375	0.708(0.504)	2.43	*
	研究推進委員以外(n=13)	2.846	3.000	0.154(0.556)		
教師理解	研究推進委員 (n=6)	2.667	2.792	0.125(0.419)	0.42	
	研究推進委員以外(n=13)	2.558	2.635	0.077(0.366)		
生徒理解	研究推進委員 (n=6)	2.875	3.250	0.375(0.605)	2.51	*
	研究推進委員以外(n=13)	2.692	2.712	0.020(0.162)		
						*p<0.05

表6 教師アンケート結果

・専門的な知識を具体的に示してもらったり、マニュアル（話し方や折り合いのつけ方カード、板書グッズなど）を提示してもらったりして、とても参考になる。
 ・現場で働く立場とは違う視点で、気付いたことやアドバイスなどを言ってもらえるのはとてもありがたい。
 ・学年で話すことで自由に意見が言える。
 ・個人の考え、意見を発表することにはやや抵抗があるが、学年として出た意見であれば何か言いやすい。
 ・学級活動の指導の仕方が全くわからなかったため、各学年で考えたり話したりすることで、とても参考になり勉強になりました。

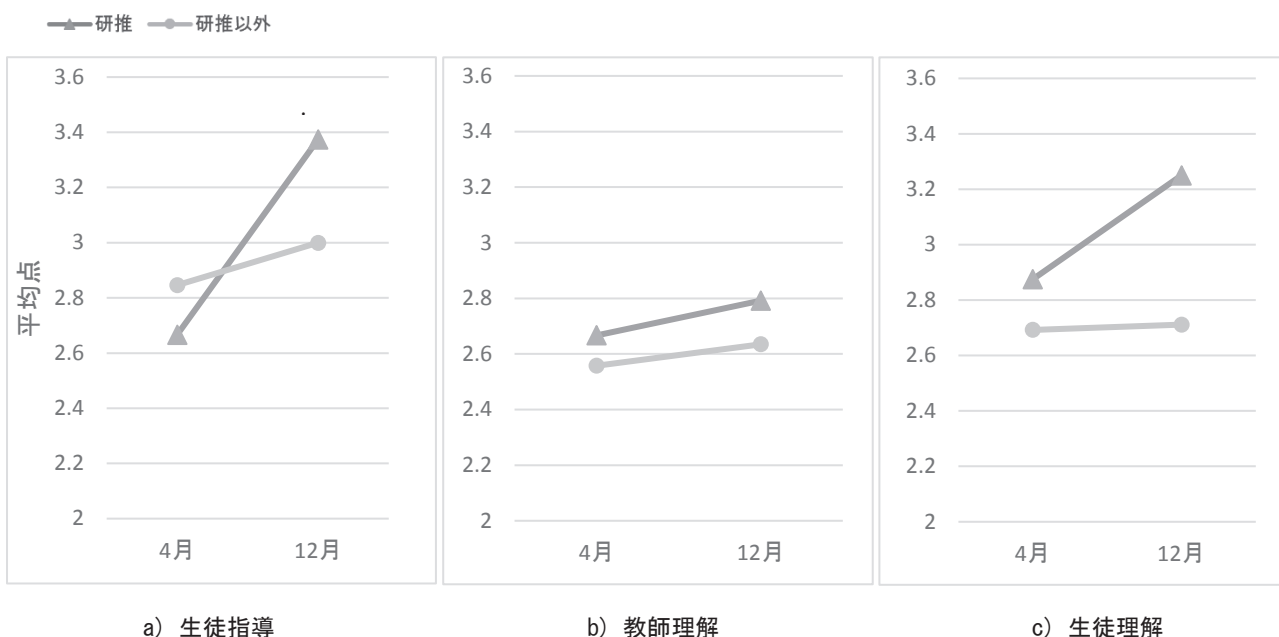


図6 小学校教師版自己効力感尺度

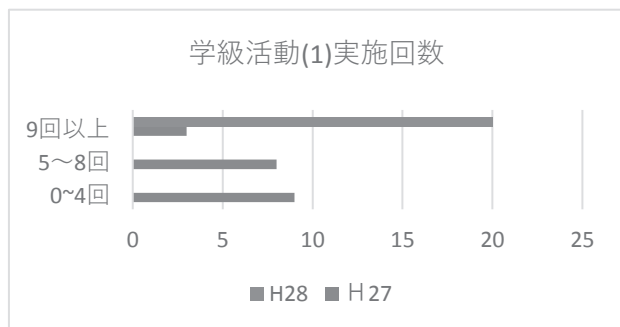


図7 学級活動(1)の授業時数の前年度比較

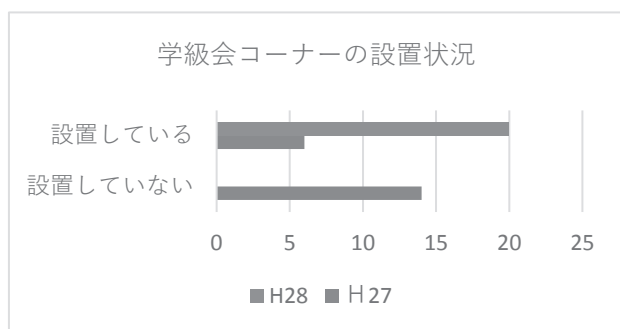


図8 学級会コーナー設置の前年度比較

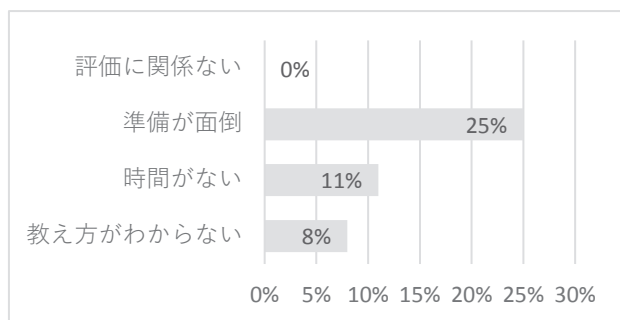


図9 学級活動に関する考え方(12月)

学級活動に対する考え方が改善されている(図9)ことなどからもコンサルテーションの成ことから効果があったと考える。

(2) コンサルテーションの児童への効果について

学級風土の向上について、「小学生版学級風土質問紙」(図10)で実証を行った。

表7・表8・表9は、小学生版学級風土質問紙の結果である。その結果、学校全体の「学級活動への関与」「学級内の不和」「学校への満足度」「自然な自己開示」「学習への志向性」「規律正しさ」について、1学期と2学期の数値変化を比較すると、表7に示す通りである。これを見ると、「学級活動への関与」の数値が0.05上昇し、「学級内の不和」は0.03上昇、「学校への満足度」は0.02上昇、「自然な自己開示」は0.03上昇、「学習への志向性」は0.02上昇、「規律正しさ」は0.06下降を示していることが分かる。

このような結果が見られたのは、特別活動全体計画の見直しと修正を行ったことや、年間指導計画について前年度からの課題を踏まえた修正を加えたことなどが考えられる。また、図7や図8に示すように、学級活動(1)の授業時数が年間指導計画に沿って大きく増加したことや、学級会コーナーが各学級に設置され教師の意識だけでなく児童の意識にまで働きかけ、環境が整えられたことが理由として考えられる。

さらに、研究推進委員の学級では、表8の結果になった。この結果、「学級活動への関与」の数値は0.18上昇し、「学級内の不和」は0.09下降、「学校への満足度」は0.12上昇、「自然な自己開

示」は0.14 下降, 「学習への志向性」は0.05 上昇, 「規律正しさ」は0.01 上昇を示している。

このような結果が見られたのは, 研究推進部に対して, 報告者が定期的また直接的に関わることでより早い段階で学級活動(1)の活発な実践が進

1 先生に言われたこと以上に作業や活動をする。	学級活動 への関与
2 クラスの活動に自分から進んで参加する。	
3 誰もがクラス全体のことを考えている。	
4 クラスがうまくいかない時にみな心配する。	
5 クラスの活動に多くのエネルギーを注ぐ。	
6 もめごとが少ない。	学級内の 不和
7 全体が嫌な雰囲気になることがある。	
8 クラスがバラバラになる雰囲気がある。	
9 お互いに嫌っている人がいる。	
10 他と一緒にいないグループがある。	学校への 満足度
11 心から楽しめる。	
12 クラスで顔を会わせるのを楽しみにしている。	
13 このクラスが気に入っている。	
14 クラスは, 笑が多い。	自然な 自己開示
15 個人的な問題を安心して話せる。	
16 自分たちの気持ちを気軽に言い合える。	
17 先生がいても遠慮なく話せる。	学習への 志向性
18 自分たちの気持ちを素直に先生に見せる。	
19 授業中よく集中している。	
20 その日の勉強や宿題をこなすことを重視する。	規律正しさ
21 クラスのみんなは, よく勉強する。	
22 このクラスは, 勉強熱心だ。	
23 守るべき規則がはっきりと示されている。	
24 掃除当番をきちんとする人が多い。	
25 このクラスは, 規則を守る。	
26 先生の指示にすばやく従う。	

図 10 学級風土質問紙の質問項目

表 7 小学生版学級風土質問紙の結果 (学校全体)

項目	1 学期	2 学期	変化
学級活動への関与	4.06	4.24	0.18 ↑
学級内の不和	2.29	2.38	0.09 ↓
学校への満足度	4.18	4.30	0.12 ↑
自然な自己開示	3.84	3.70	0.14 ↓
学習への志向性	4.17	4.22	0.05 ↑
規律正しさ	4.20	4.21	0.01 ↑

表 8 小学生版学級風土質問紙の結果 (研推学級)

項目	1 学期	2 学期	変化
学級活動への関与	3.87	3.92	0.05 ↑
学級内の不和	2.54	2.57	0.03 ↑
学校への満足度	4.25	4.27	0.02 ↑
自然な自己開示	3.74	3.77	0.03 ↑
学習への志向性	3.94	3.96	0.02 ↑
規律正しさ	4.02	3.96	0.06 ↓

表 9 小学生版学級風土質問紙の結果 (研推学級以外)

項目	1 学期	2 学期	変化
学級活動への関与	3.79	3.78	0.01 ↓
学級内の不和	2.66	2.65	0.01 ↓
学校への満足度	4.28	4.25	0.03 ↓
自然な自己開示	3.69	3.80	0.11 ↑
学習への志向性	3.84	3.85	0.01 ↑
規律正しさ	3.94	3.86	0.08 ↓

められたことが考えられる。加えて, 研究推進委員が捉える個別の疑問や学年での課題に対して, 即時に対応したり十分に時間を設けて相談に乗ったりしたことが, 研究推進委員の不安を払拭するだけでなく, 次の実践への動機づけとなったと考えられる。

そして, 研究推進委員以外の学級では, 表 9 に示す結果になった。この結果, 「学級活動への関与」の数値は 0.01 下降し, 「学級内の不和」は 0.01 下降, 「学校への満足度」は 0.03 下降, 「自然な自己開示」は 0.11 上昇, 「学習への志向性」は 0.01 上昇, 「規律正しさ」は 0.08 下降を示している。

このような結果が見られたのは, 学校全体としては概ね効果が見られたものの, 各学年の研究推進委員の関わりによって, その学年の差が見られたためだと考える。学級の風土はそれぞれの学級で違うわけであり, 学年が同じだから同じであるとは限らない。その際に, 報告者の行ったコンサルテーションが学年全体を見通したものであったかという点と不十分な点があった。このように, 報告者の関わりについて, 学年としてのまとまりを考慮するにまで至らなかったことが課題だと考える。また, 研究推進委員会の開催については, 教務や研究主任との打ち合わせの中で綿密に計画され, 定期的に開催することができていた。その中で, 研究推進委員は時間が十分に確保され, 定期的に学級活動(1)の進め方について学んだり考えたりすることができていたと推測する。疑問や質問に対しても, コンサルティである研究推進委員が何を求めているのか考慮しながら, コンサルタントである報告者は回答するように心がけた。そして, 研究推進委員に対するコンサルテーションを行う際には, 紙面での提案や実物をもとに話すようにし, 後に見返すことのできるような資料作

表 10 学級活動(1)の効果として感じる事

- ・事前準備のため休み時間に子供たちと考えたり話したりする時間が増え知ることができた。子供たち同士, それぞれの意見を交流することでいろんな面を分かり合える時間, 知る時間が増え, クラスがまとまってきたように思う。
- ・目的・内容・方法の見通しをもたせ, それが全員のものになれば, 子供自身で子供なりに課題解決を図っていくことができるということを感じた。
- ・子供たちの中に「自分たちで何かしよう」という意識が生まれた。
- ・全員が主体的に参加することができる。
- ・学習が苦手な子でも学級会にはちゃんと参加して, 手を上げて発表する姿が見られる。普段クラスでなかなか発言できない子にとって, 一つの居場所づくりになっているのではないかと感じる。

りに心がけた。その結果、研究推進委員は手元に資料が残る。一方で、研究推進委員以外の教師は、口頭での伝達を受けるのみになっていることが多く、その場では理解し納得していたとしても、資料として残る物がなかったことも課題解決に向けて考慮していく視点だと考える。

さらに、小学生版学級風土質問紙の結果として、数値は上昇したものの有意な差は見られなかった。しかし、「学級活動への関与」が積極的に行われていない学級では、「自然な自己開示」の平均点も全て下降していた。このことから、学級活動に関わっている子供は、そこに自分の役割があり学級の一員であるという自覚が高く自分たちで学級の課題を解決しようとする意識が強いので、学級風土が向上することが考えられる。また、主体的に生活づくりに取り組む児童を育み学級も安定することが推測される。さらに、教師自身もそれを実感していることが、教師に対するアンケート調査からも明らかである（表 10）。

以上の結果から、校内研究システムにおけるコンサルテーションと学級活動(1)の実施の充実とは、学級風土の向上に効果を発揮し、主体的により良い生活づくりに参画する児童を育むことに寄与するということが明らかになった。

総合考察

本研究は、学級担任の学級活動(1)の指導力向上を目指して、報告者が研究主任や研究推進委員にコンサルテーションを行う校内研究システムに介入し、各学級の学級風土を高めることによって、主体的により良い生活づくりに参画する児童を育むことを目的としたものである。

研究Ⅰでは、学級担任の、学級活動の指導に関する意識を調査することによって学級活動の指導上の課題がわかった。学級活動の具体的な指導方法がわからないことや、学級活動の充実は学級経営に効果があると感じながらも時間がないという理由で実施できていなかったり他教科に比べて教科書がないために実践している指導内容に不安を抱いていたりとしていることが明らかになった。

研究Ⅱでは、授業支援を通じて学級活動(1)のコンサルテーションの内容を探った。そこでは、学級活動(1)を実際に行うためのそれぞれの過程ごとの指導が必要であるということがわかった。

研究Ⅲでは、研究Ⅰ、研究Ⅱを受けて、校内研究システムにおけるコンサルテーションを通じて、学校全体の教員の学級活動(1)の指導力向上を

目指した。また、各学級の学級風土を向上させることで、在籍校の目指す主体的により良い生活づくりに参画する児童を育むことをねらった。

報告者が、研究主任や各学年の研究推進委員に、コンサルテーションを通じて学級活動(1)の授業力の向上を図る校内研究システムでは学級風土を向上させる教師の指導力が向上し、本校の教育課題である主体的により良い生活づくりに参画する児童を育むことができるということが明らかになった。また、学校全体の教育課題を解決していくためには、全職員が協働して実践を行っていく必要があることも分かった。今後も、積極的に学級活動(1)に取り組み、全ての学級で実践を積み上げていくことが大切であると考ええる。

各学校には生徒指導上の問題を解決する組織が存在する。これらの組織が効果的に機能するよう、各学校に既に存在する組織の活性化を図る工夫が不可欠である。例えば、今回、報告者が研究推進部の構成員を支えるような、コンサルタントして直接関わるなどの工夫である。そのことによって、直接関わった研究推進部の教師と、そうではない教師に比べて効果の有意な差が見られた。しかし、学校は全ての教師が学級活動(1)の実践的指導力を身につけていかなければならないので、学年の研究推進委員から各学級の担任にコンサルテーションの内容が確実に伝わっていくようなシステムを構築していくことが課題である。

主な引用・参考文献

- 伊藤亜矢子 2009 小学生版学級風土質問紙の作成と活用 コミュニティ心理学研究, 第12巻2号, 155-169
- 伊藤亜矢子・松井仁 2001 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究, 49, 449-457
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説特別活動編 東洋館出版社
- 高田大二郎・綱谷綾香 2016 小学校の教育相談担当者が行う 教師へのコンサルテーションに関する研究Ⅱ —コンサルテーションの実態およびその有効感との関連に焦点を当てて— 佐賀大学 文化教育学部研究論文集, 20(2), 107-115

謝辞

本研究を行うにあたり、機会を提供していただいた福岡県教育委員会、久留米市教育委員会の方々に心より感謝申し上げます。また、在籍校の校長先生をはじめ、関係の先生方には多大なるご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。